

出エジプト記26章「幕と板の仕切り」

1A 四枚の幕 1-14

1B 撚り糸の幕 1-6

2B やぎの毛の幕 7-13

3B 赤くなめした雄羊の皮とじゅごんの皮 14

2A 板と横木 15-30

1B 板 15-25

2B 横木 26-30

3A 垂れ幕と入口の幕 31-37

1B 垂れ幕 31-35

2B 入口の幕 36-37

本文

出エジプト記26章を開いてください。私たちの学びは、会見の幕屋のところに入っています。前回のおさらいをしてみましょう。主は、モーセに対して、ご自分が住まわれ、ご自分が語られる幕屋を造るように命じられました。聖書には、神の家と呼ばれるものが初めから終わりまで出て来ます。エデンの園がある意味で、アダムと神が共に住む大きな家のようなものでしたが、彼が罪を犯したので、そこから出なければいけませんでしたが、けれども、そこに戻るべく主は、いけにえの流す血によって近づくことができるようにされました。ヤコブが天からのはしごを見て、そこで主が語られたので、そこはベテルだ、つまり神の家だと言いました。

そして主は、イスラエルの民に対して、彼らが宿営する真ん中に住んでくださる証しとして、幕屋を造るように命じられ、同じ形のもので寸法を二倍にした神殿を、後にソロモンが建てました。バビロンによって滅ぼされましたが、帰還した後に再建し、イエス様が地上におられた時にもヘロデによって改築されたその第二の神殿は建っていたのです。

しかし主は、ご自分は神であるのに人となられて、人々の間に住まわれました。それはすなわち、人々の間に幕屋を張られたのと同じでした。肉体を取られたイエス様によって、私たちは神と共に住み、神から聞くことができるからです。そして聖霊が弟子たちに降り、教会が生まれました。教会を、今は「神の宮」と使徒たちは教えているのです。そして、イエス様が再び地上に戻って来て、千年間の統治の時に神殿を再建され、また新天新地において天からのエルサレムが降りてきます。「黙 21:3 見よ。神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」このようにして、神のご計画の中で、初めから終わりまで、神は私たちと共に住むことを望まれ、天にあるその住まいを地上で模型のように置いてく

ださったのが、モーセの幕屋であります。

主は、ご自身が御座に着いておられる最も中心的な部分を、契約の箱とその上の宥めの蓋によって示しておられました。契約の箱の中には十戒が刻まれている石が置かれています。つまり、神のことばがその本質であります。その上にケルビムがひれ伏した格好で、二つが翼を重ねていますが、それはケルビムが主なる神を礼拝している姿です。その間に、主がおられて語ってくださいます。宥めの蓋は、そこに大祭司が血を振りかけるのですが、罪の赦しと清めをするものであり、イエス様ご自身が神の御怒りを、その流された血によって宥められたことを示しています。

それが至聖所に安置されることになり、その外側の聖所には、東から入って右側、すなわち北側には、臨在のパンの机があり、左側、すなわち南側には、聖所全体を照らす燭台があります。臨在のパンは、イスラエル十二部族が神の前に捧げられていることを示していて、パンは神の命を示しています。それで、イエス様は「わたしがいのちのパンです」と言われたのは、イエス様こそが、私たちが神の前に出る時の命になってくださっているということです。そして燭台は純金で尽きられ、アーモンドの木を模したものになっていて、七つの枝があり、その上に灯皿があります。そして油をそこに注いで光を灯すのですが、イエス様は「わたしが世の光です」と言われて、黙示録 1 章には、七つの燭台が七つの教会を示していました。キリストが住まわれ、その光を受けています。

1A 四枚の幕 1-14

そして 26 章は、幕屋の中で最も特徴的な部分、つまり「幕」そのものです。遊牧民の住まいは、天幕であることは当然ですね。なぜ天幕であるかと言えば、しばし移動するからです。そして、幕は何を意味しているかと言えば、もちろん「仕切り」です。聖なる神が住まわれるところと、そうでないところを区別するためです。罪が私たちと神との仕切りになっていますが、罪ある世において聖なる神との間には隔たりがあります。しかし、私たちはキリストによって神に近づくことができます。これから見ますが、幕はキリストご自身を指し示しています。そしていつも、神に近づくことによって、初めて聖なるものと、俗なるものとの区別がつかます。私たちが、神への礼拝を持つということは、この世においていかに、何がみこころで、正しいことで、良いことなのかを見分ける分水嶺となっています。

1B 燃り糸の幕 1-6

1 幕屋を十枚の幕で造らなければならない。幕は、燃り糸で織った亜麻布、青、紫、緋色の燃り糸を用い、意匠を凝らして、それにケルビムを織り出さなければならない。2 幕の長さはそれぞれ二十八キュビト、幕の幅はそれぞれ四キュビトで、幕はみな同じ寸法とする。3 五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、もう五枚の幕も互いにつなぎ合わせる。4 そのつなぎ合わせたものの端にある



幕の縁に、青いひもの輪を付ける。もう一つのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁にも、そのようにする。5 その一枚の幕に五十個の輪を付け、もう一つのつなぎ合わせた幕の端にも五十個の輪を付け、その輪を互いに向かい合わせにする。6 金の留め金を五十個作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせ、こうして一つの幕屋にする。

幕において重要なのは、それが「燃り糸」だということです。ソロモンが伝道者の書で、「4:12 一人なら打ち負かされても、二人なら立ち向かえる。三つ燃りの糸は簡単には切れない。」と言っていますが、複数あってもそれは一つであるかのようになっています。これは、一人の人物、その人生によって成就しているからです。亜麻布であります、そこには清さと正しい行いがあります。そして、青色は天を示しています。天からの聖霊をイエス様は受けられました。そして、紫は王位の色です。イエス様はユダヤ人の王として十字架に処せられました。そして緋色は、血の赤色のことですが、キリストの流された血を示しています。したがって、ここには全てイエス・キリストの栄光と、この方が十字架上で行なわれた御業が織り込まれているのです。主は天から来られました。そして何一つ罪を犯されない白さを持っておられました。ユダヤ人の王として来られましたが、拒まれました。ローマ兵から嘲弄され、そして血を流されました。

そこに、ケルビムが織り出されています。キリストがおられるということは、そこは父なる神がおられることであり、そしてケルビムが礼拝しているということです。イエス様が病を治されたりすると、驚きが起こり、人々が神をあがめたとありますが、それは神のご臨在のところには、ケルビムのように神をあがめ、神を礼拝する、いわば霊の空気があるからです。また、ケルビムが幕になっているということは、この仕切りがエデンの園を守った時のことを思い出させているのかもしれませんが、中を守るために、炎の剣をもっていたケルビムと同じように、外から入ってこようとする者たちから、神のご臨在を守るためにそこに立たせられているとも考えられます。

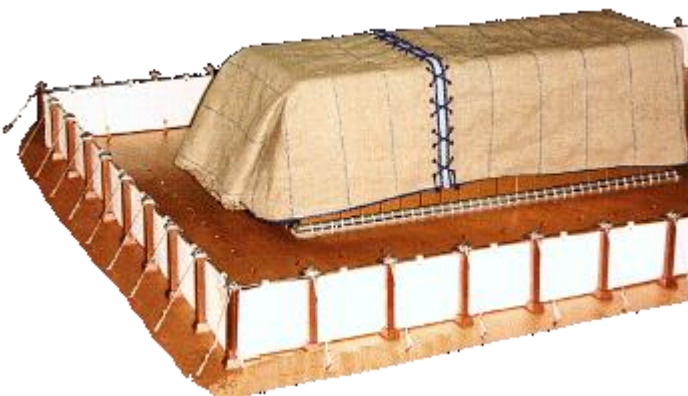
そして幕は長さが二十八キュビトです。聖所の高さと同幅はそれぞれ十キュビトなので合計三十キュビト必要なのですが、一キュビトぐらい地面から離れているようにしています。地面に接していないというのも、意味があります。地は、アダムの罪によって呪われたところであり、それゆえ、天と対比されて地は、悪を象徴している面があります。ヤコブが手紙の中で、苦々しい妬みや利己的な思いについて、「3:15 そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。」と言っています。そして四キュビトが合計十枚ですから、四十キュビトであり、聖所の寸法は長さ三十キュビトで高さが十キュビトなので、ちょうど聖所の入り口を除いたすべてが覆われることとなります。

五枚と五枚の間を直接つなぐ、青色の輪と金の留め金によってつなぎます。なぜでしょうか？そこは、聖所の中でも聖所と至聖所に分れる部分だからです。神は、ご自分の栄光が留まる、契約の箱が安置されている至聖所と、その他の聖所の部分を厳格に分けられているのです。幕と

言えども、その部分において一つなぎになってはいけないとお考えになったのです。ここに、さらに神の聖さにある、この世との隔絶があります。そして、そのつなぎ目が青色の糸と金の留め金というのも興味深いです。その隙間から天の栄光が、そして神の光を表す金が漏れ出している姿を表わしています。

2B やぎの毛の幕 7-13

7 また、あなたは、幕屋の上に掛ける天幕のために、やぎの毛の幕を作らなければならない。その幕を十一枚作る。8 幕の長さはそれぞれ三十キュビト、幕の幅はそれぞれ四キュビト、その十一枚の幕は同じ寸法とする。9 そのうち五枚の幕を一つに、もう六枚の幕も一つにつなぎ合わせ、その六枚目の幕を天幕の前で折り重ねる。



10 つなぎ合わせたものの端にある幕の縁には五十個の輪を付け、もう一つにつなぎ合わせた幕の縁にも五十個の輪を付ける。11 青銅の留め金を五十個作って、その留め金を輪にはめ、天幕をつなぎ合わせて一つとする。12 天幕の幕の余って垂れる部分、すなわちその余りの半幕は幕屋のうしろに垂らす。13 そして、このうち一キュビトともう一方の一キュビトの、天幕の幕の長さで余る部分は、幕屋をおおうように、その天幕の両側、手前と奥側に垂らしておく。

キリストの御業を見つめる幕の上には、山羊の毛の幕です。枚数が、幕が十枚であったのに対して、こちらは十一枚です。その余分の一枚は、幕屋の入口のところで一枚折り重ねます。奥にある幕の部分が見えないようにし、山羊の幕が目立つようにするためなのでしょう。

「やぎの毛」であります。やぎは年に一度、イスラエルの全体の罪の贖いをするために行なう「贖いの日」において、用いられるいけにえの動物です。レビ記 16 章に詳しく書かれています。やぎ二匹を用意します。大祭司本人が雄牛をほふって、それを自分自身の罪のいけにえとします。その後で、くじを引いて、やぎ二匹やぎのうち当たったやぎは、生きてまましておきます。一匹はほふって、その血をイスラエルの民のための罪の清めのために捧げます。そしてもう一匹を、遠くに追いやります。ユダの荒野のはるか遠くにさまよい、見えなくなったことを確認して、「罪はこのように遠くに引き離された」ということを祭司が宣言するのです。したがって、やぎの毛は罪が清められ、贖われ、それから、罪が遠くに引き離されること、取り除かれたことを表します。

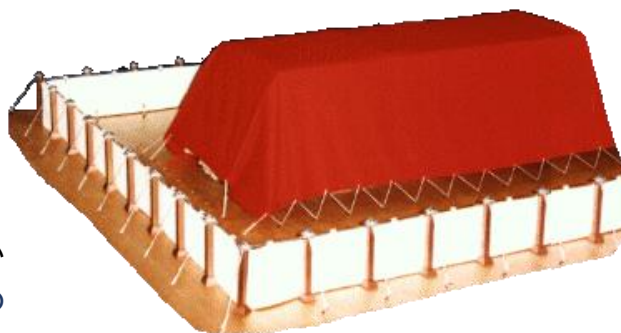
そして、聖所と至聖所のつなぎ目が、「青銅の留め金」になっているのです。先の幕においては、金の留め金でした。けれども、さらに外界に接しているために、金ではなく青銅になっています。「青銅」は神の裁きを表しています。(青銅の蛇を神がモーセに作りなさいと命じられたのは、悪魔がそこで裁かれたことを意味するためでした。)したがって、私たちが見ることのできる原則は、「外

界に接すれば接するほど、神の栄光は裁きに変わる」ということです。内側では金が使われていても、外側では青銅が使われています。これは、外庭の祭壇でも同じで、青銅で覆われます。

これが天と地との違いです。シナイ山にて、天から神の栄光が現れると、そこは雷や稲妻、黒雲や地震など、そこは裁きの様相でした。エゼキエル書 1 章に出て来るケルビムも、青銅の輝きを持っていますが、その上は青色の空のようになっていて、同じく天の輝きが地上に近いほうでは、青銅になっているのです。黙示録では、天において神の栄光がほめたたえられているけれども、地上では神からの裁きが下る姿を描き出しています。その中で、黙示録ではイエス様が「子羊」として紹介されているのです。つまり、天につながるには、子羊なるイエス様の犠牲の血、神に対する宥めがあってこそつながりなのだということです。

3B 赤くなめした雄羊の皮とじゅごんの皮 14

14 天幕のために、赤くなめした雄羊の皮で覆いを作り、その上に掛ける覆いをじゅごんの皮で作る。



一節だけですが、ここにさらに二つの幕の覆いが書かれています。やぎの毛の幕の上に、「赤くなめした雄羊の皮」で覆います。雄羊といえば、アブラハムに対して神はイサクに代わって、備えてくださった雄羊があります。その雄羊は、イサクの身代わりになりました。そしてその話は、明確に父なる神と子なるキリストを表していました。つまり、これはキリストが流された血、罪の赦しのための血の色です。また、レビ記 8 章によれば、アロンとその子らがその務めに任じられる任職式の時に、一頭の雄羊がほふられて、その血を右の耳たぶと、右の親指と、右足の親指に塗ることによって、聖別しました。主の声を聞き、主の御心を行い、主に従うことを意味していますが、イエス様は、父なる神の声を聞き、その御心を行い、父に従われた方です。

この雄羊が屠られ、血を流したことを象徴する幕は、先の山羊の毛の上を覆います。その流された血によって、やぎの毛が象徴する罪の赦しと清めがあり、そしてもっと奥には幕が象徴しているキリストの恵みの栄光があるのです。



さらに、もう一つ「じゅごんの皮」の覆いをします。原語のヘブル語では、これが何を意味するか確かなものはないとのことですが、紅海に生息している生物であると言われていて、「じゅごん」と新改訳では訳されています。そして、皮はどす黒い色をしていたのではないかとされています。この覆いによって、さんさんと照り輝く太陽の光から守られ、砂嵐からも守られたことでしょう。また防水効果もあったので、雨も防いだことでしょう。

う。イエス様の生涯をよく表しています。ご自身が 40 日間、荒野で誘惑を受けられました。人としての弱さを持っていながらも、主なる神に仕えられました。このキリストにあって、私たちも弱い存在ですが、いろいろな試みを受けますが、守られるのです。

そして、幕屋は、外見は何の変哲もない、見とれるものがないということが分かります。人としてのイエス様の姿でありました。「イザ 53:2-3 彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」この世的には見とれるものは何もなかったのです。そして、聖所は、内側は金色で光り輝いていますが、外から見れば何の変哲もないのです。これが、私たちの信仰が必要なところであり、そしてイエス・キリストを通しての信仰が必要になる所以です。キリスト教、そしてイエス・キリストを、強い関心も持たずに、表面的になぞるのであれば、何ら面白くないものはありません。けれども、キリストが自分自身の人生の根幹にかかわる存在であり、この方の十字架が自分に関わることであることを悟った人々は、そこから神の栄光を見ることができるのです。

2A 板と横木 15-30

では、これら四枚の覆いをかけるための、聖所の骨格となっている部分を見ていきます。

1B 板 15-25

15 この幕屋のために、アカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作る。16 一枚の板は、長さ十キュビト、板一枚の幅は一キュビト半。17 板一枚ごとに、はめ込みのほぞを二つ作り、幕屋のすべての板にそのようにする。18 幕屋のために板を作る。南側に二十枚。19 その二十枚の板の下に銀の台座を四十個作る。一枚の板の下に、その二つのほぞのために二個の台座があり、ほかの板の下にも、二つのほぞのために二個の台座を作る。20 幕屋のもう一つの側、北側に板二十枚。21 銀の台座四十個。すなわち、一枚の板の下に二個の台座。次の板の下にも二個の台座。22 幕屋のうしろ、西側に板六枚を作る。23 幕屋のうしろの両隅のために板二枚を作る。24 これらは底部では別々であるが、上部では、一つの環のところの一つに合わさるようにする。二枚とも、そのようにする。これらが両隅となる。25 板は八枚、その銀の台座は十六個。すなわち、一枚の板の下に二個の台座、ほかの板の下にも二個ずつの台座となる。



幕屋は運搬用の住まいですから、取り外して、簡単に組み立てられるようなものでなければいけません。それで板で壁を作ります。長さを計ると、全体で長さが三十キュビト、幅と高さが十キュビ

トです。西側、すなわち至聖所の裏は六枚の板なので9キュビトなのですが、北と南の板の厚さがありますから、合計すると十キュビトです。ですから、三対一の長方形になっていますが、その中の至聖所は長さ、高さ、幅がすべて十キュビトであり、立方体になっています。そして聖所は高さと同幅は同じ、長さが二倍の空間になっています。興味深いのは、天のエルサレムの都も、立方体であることです。「黙 21:16 都は四角形で、長さと幅は同じである。御使いが都をその竿で測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。」幕屋は天にあるものの模型であると、私たちは学びましたね。

終わりの日、神のご計画が完成し、救いが完成した時の姿は、神とキリストご自身の臨在の中に私たちが入っているということです。私たちの内にキリストがおられるということは、しばしば意識しますが、真実な救いは、神とキリストの中に私たちがいる、一体化しているということです。私たちが主を知っている以上に、私たちが主から完全に知られています。だからこそ、どんなことがあっても、自分には分からないことが起こっても、それでも主の中にいるとして安心できるのです。

そしてその下に板を固定するための台座が用意されています。使われるのは金ではなく「銀」です。銀については、前回、「贖い」あるいは「償い」を意味することをお話しました。律法の中で、他人の奴隷を牛が殺した時に、その牛の持ち主が、奴隷の主人に銀貨三十シケルを支払います。またレビ記には、贖い金として銀貨が用いられています。したがって、銀は「贖いをするための対価」を意味しています。台座は、直接、地面に付いています。金で覆われている板ですが、それは神の御座からの栄光を表していますが、それが地面に接する時は、そこに贖いが必要で、それによって初めて、地上にいる者が神の栄光に見えることができます。

2B 横木 26-30

26 また、アカシヤ材で横木を作る。すなわち、幕屋の一方の側の板のために五本、27 幕屋のもう一方の側の板のために横木五本、幕屋のうしろ、西側の板のために横木を五本作る。28 板の中間にある中央横木は、端から端まで通るようにする。29 その板に金をかぶせ、横木を通す環を金で作る。横木にも金をかぶせる。30 こうして、あなたは、山で示された定めのおりに幕屋を設営しなければならない。

これは 板を固定するための棒です。各面に五本の横木を通しこれらを固定します。私たちの手元にある図ですと、側面に四本の棒があるのがお分かりになると思います。なぜ四本かと言いますと、中央の横木は板の中を通っていて、見えないからです。ある図では、側面に二本だけもあります。それは、棒がすべて端から端までつながっているのではなく、真ん中辺りで分かれており、二本の棒になっているからと見ているからです。

このように、しっかりと組み合わさっており、板も台座と横木のおかげで揺らいだり、倒れたりす

ることはありません。使徒パウロは、この様子を思い浮かべながら、教会が成長する様を説明したのでしょう。「エペ 4:16 キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わせられ、つなぎ合わされ、それぞれの部分はその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられることとなります。」

そして五本、という数字にも注目したいと思います。これからも幕屋の寸法で五、また五十という数字が多く出て来ます。外庭も幅が 50 キュビトで、長さが 50 キュビトの二倍の百キュビトです。新約聖書の中にもその数字が出て来て、あの五千人の給食の奇跡がそうです。手元にあるパンは、「五つです。それに魚が二匹います。」と弟子がイエス様に答えています。それから、「人々は、百人ずつ、あるいは五十人ずつまとまって座った。」とあります(マルコ 6:28,40)。そして五千人が食べてたのです。それから、残ったパンの数は 12 かごでしたから、明らかにイスラエル十二部族を示しています。そう考えると、五という数字は、イスラエルという家を治めるのに人々が割り当てられている数とも言えるかもしれません。ある人は、「人間の責任を示唆している」と言っています。人体の構造も、手や足の指が片方で 5 本、両方で 10 本ですね。

そのようにして考えて、改めて先ほど引用したエペソ 4 章の言葉に戻りますと、キリストが賜物として与えられている五つの役職があります。「4:11 こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。」教会においても、人々が割り当てられている分担があり、それぞれが賜物を用いてその役割をしっかりと果たしていくことによって、霊の家がしっかりと建て上げられていくのです。

3A 垂れ幕と入口の幕 31-37

次は、至聖所と聖所を仕切る垂れ幕と、幕屋と外界を仕切る、入口の幕についてです。

1B 垂れ幕 31-35



31 また、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用いて、垂れ幕を作る。これに意匠を凝らしてケルビムを織り出す。32 この垂れ幕を、金をかぶせたアカシヤ材の四本の柱に付ける。その鉤は金で、柱は四つの銀の台座の上に据えられる。33 その垂れ幕を留め金の下に掛け、垂れ幕の内側に、あかしの箱を運び入れる。その垂れ幕は、あなたがたのために聖所と至聖所との仕切りとなる。34 至聖所にあるあかしの箱の上には『宥めの蓋』を置く。35 垂れ幕の外側には机を置く。机は幕屋の南側にある燭台と向かい合わせる。その机は北側に置く。

聖所と至聖所の間にある垂れ幕です。至聖所の中に、あかしの箱、すなわち契約の箱を入れます。そしてその箱に宥めの蓋を置きます。これは、幕と同じように、亜麻布を用いて青色、紫色、緋

色の撚り糸で作ります、そしてケルビムを織り出します。そして、これを上から掛けなければいけません。それで、掛けるために柱を四本用意します。この柱も台座は銀です。そして金の留め金を柱に付けて、垂れ幕をかけるのです。

レビ記 16 章には、この垂れ幕の中に入る、大祭司の儀式が書かれています。贖いの日、レビ記 23 章にも書かれている儀式です。ですから年に一回、大祭司のみが血を携えて、また香壇からの煙も中に入れて、それから入り、イスラエルの民の罪の赦しを執り成すのです。ここで、異なることを行ったら、その場で死んでしまいます。レビ 10 章に、アロンの二人の息子が異なる火を携えて行って、その火が全身に燃え移って倒れて死んでしまったことが書かれています。それだけ聖い所なのです。神の御座そのものを表していますから。

しかし、人類の歴史の中で、神のご計画の中でこの垂れ幕が裂けたという一大事が起こりました。「マタ 27:50-51 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」イエス様が十字架の上で、「完了された」という言葉を語られ、息を引き取られ、するとこの幕が裂けたのです！しかも、下から上ではなく、上から下に裂けたのです。これは神ご自身が天からキリストの肉体の死によって、この仕切りを取り除かれたということです。「ヘブル 10:19-20 こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。」イエス様の肉体が、先に申し上げたように仕切りとなってくださいました。その肉体が裂かれたのは、父なる神と私たちの間にある仕切りが取り除かれるためでした。つまり、イエス様ご自身が罪とみなされ、その代わりに私たちが無罪、義とみなされるためです。このようにして、私たちが神の前に出る時は、その御座は裁きの座ではなく、恵みの座になっているのです。「4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

それから垂れ幕を掛ける時の柱が四本でしたが、四も聖書によく出て来る数字です。特にエゼキエル書 1 章では、ケルビムが四つ現れ、それぞれが四つの顔と四つの翼を持っていたとあります(1:5-6)。また、四方からの風という表現もあります。そしてイスラエルの宿営は東西南北という四方からそれぞれ三部族が宿営し、天のエルサレムの都も同じように四方に壁があります。これは、「取り囲む」というようなイメージがあるでしょう。ケルビムは、主ご自身を取り囲むようにしてひれ伏しています。興味深いことに、福音書は四つあります。二つや三つではなく、四つなのです。これにも神の意図があるのかもしれませんが。主イエスにある神の栄光を、四つの証言によって取り囲むようにして証しているということなのかもしれません。

2B 入口の幕 36-37

36 あなたは天幕の入り口のために、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、

刺繍を施して垂れ幕を作らなければならない。37 その幕のためにアカシヤ材の柱を五本作り、これに金をかぶせる。その鉤も金である。それらの柱のために青銅の台座を五つ鑄造する。



聖所の入り口にある幕です。内側の垂れ幕は柱が四本でしたが、こちらは柱五本です。五は人間の責任分担であれば、祭司たちがここから奉仕の務めを果たすべく入って行くにはふさわしい数です。使徒パウロは、教会について柱のことも説明に使っています。「I テモ 3:15 神の家とは、真理の柱と土台である、生ける神の教会のことです。」私たちは、真理を告白する共同体であります。使徒ペテロは、イエス様を、「あなたは生ける神の御子キリストです。」と言いました。私たちは、単にキリストの真理を土台にしているだけでなく、真理を柱ともしています。つまり、人々に見えるようにしていくということも含まれています。真理を告白する共同体なのです。「イエスは主」と告白するのが、最も短いものでしょう。ペテロが、「あなたは生ける神の御子、キリストです」というのも告白です。これらの真理を心の中で抱いているだけでは教会ではありません、明確に公に、証しするのです。

そして、この柱ですが垂れ幕にあった柱との違いは「台座」です。銀ではなく「青銅」で出来ています。板の下にあった台座が銀でありましたが、こちらは外庭に直接に接しています。外界に接している所は神の裁きがあることを示しています。

次回 27 章は、その外庭にある最も中心的な存在、青銅の祭壇から見ていきます。